

連載
第70回
福聚山史
文池浦泰憲

○仏具の修繕

お寺では、現在、本堂内の仏像や仏具等の修繕を順次すすめている。すでに修繕が完了したものもあり、戻ってきた仏具の輝きに心が新たになる。

ところで、これらの仏具をみると、ほとんどに銘が入っている。たとえば、法要や葬儀で使われる鑊鉞の一对の台にはそれぞれ

為 ○○院○○○居士 追善

○○年○○月○○日

施主 ○○○○

というように記されている。この仏具が寄進されたものであり、その寄進者（施主）がどのような願いをもって寄進したのかが明記されているのである。ちなみに一方の台は、昭和三十五年五月一日の第一周忌の折に寄進されたもので、「新宿区柏木町一丁目 常円寺 及川日修代」と常圓寺の当時の住所が記され、どの住職の代であったのかも記されている。

このように、現在常圓寺で使われる仏具の多くは、檀信徒の寄進によって揃えられている。

○『明治十年寺院明細簿』

過去の常圓寺に関する史料をみていくと、当時山内にとどのような仏像や仏具が揃えられていたのかを知ることができる。その中で、明治十年（一八七八）に提出した『寺院明細簿』は特に詳細に記録されている。

この明細簿については、すでに何度も取り上げているが、明治十年に東京府によって作成が

命じられた。その際の指示内容を伝える文書に「社寺明細帳 壬申年間編纂二付、爾後ノ異動不^{みずのえ}勘^し」とあるように、「壬申年」＝明治五年にも調査が行われ、「社寺明細帳」が編纂された。その後、数年が経ち寺社の移転などが把握できなくなったため、改めて取り調べを行うことになったという。

明治五年時の常圓寺の明細帳と比較してみると異なる記載項目がみられ、この『明治十年寺院明細簿』には、境内地ほかの所有地の項目の詳細化（『福聚山史』第五十四回参照）、そして本尊や諸尊像の他、所有什物、さらには境内図も記載されている。

○『明細簿』の什物

さて、『明細簿』には、境内地等に続き、「宝暦年間十七世日清再建」と付記された本堂、同じく「宝永七寅年 十一世日暹再建」との付記がある庫裏、祖師堂などの建物に加え、「立木十五本」の記載もある。続けて「宝塔中題目」「多宝 釈迦」をはじめとする十五躯の「本尊」などの木像に加え「釈迦涅槃画像」も記される。そしてこの後に「前机、真鍮五具足、真鍮灯籠、法華経、経机、聲、罽口、鑿、鑊鉞、銅鑼鼓、太鼓、幕」というように、堂内を荘厳する仏具が揃えられていることがわかる。

注目されるのは、このあとに続く品々である。列記してみると、「釜、茶釜、火鉢、燭台、煙草盆、土瓶、茶碗、膳碗、茶漬茶碗、長持、半鐘、鉄天水鉢、石手水鉢、石手水盥、勝手道具、蚊

帳・夜具」などである。

これらは、直接的に仏事に関係するものではなく、蚊帳や夜具など日常生活道具といえるであろうか。あるいは、煙草盆や土瓶が十個、茶碗が百個、膳碗・茶漬茶碗が二十人前、などをみると、接待用の道具も含まれているともいえる。こうした物までが、東京府の求めに応じて記載されている点は、明治五年の『明細帳』や、さらに遡った江戸後期の『御府内寺社備考』にはない特徴である。いわば常圓寺の「財産目録」といってもよいのかもしれない。

○祖師堂の「什具」

『明細簿』はこのあと「祖師堂什具」として「日蓮木像」から始まり、品々が記されていく。こちらにも法華経、経机などが記載されるが、先にあげた什物にはみられなかった袈裟、衣、天井から掛けられる天蓋、法要の際に導師が着座する礼盤や、過去帳の台、香爐、供物などを載せる三方、華瓶、さらには御鬮番付入篋筒、御鬮箱台などがみえる。

これらの品々が「祖師堂什具」と別にされていることから、先にあげた本尊や什物は、本堂と、あるいは庫裏に付属していたものであると考えられるが、両者を比べてみると、特に礼盤や過去帳台など、勤行や仏事を行うための什具が祖師堂の方に集まっているように思われる。



本堂の礼盤

さらには御鬮箱などが置かれていたことから、日頃、参拝者が礼拝す

るお堂であったことも想像される。こうした点から、あくまでも推測であるが、当時は祖師堂が日常的な仏事が行われるお堂、礼拝の場所であったのではないだろうか。

○本堂の機能

その一方で、本堂あるいは庫裏には、数えそるえた茶碗や膳などが什具とされていることから、本堂は来訪者の接待場所としての機能を担っていたとも推測できる。この点については、先に『御府内寺社備考』において、常圓寺の境内図に「本堂」とされる建物がなく、「客殿」があったことに触れ、「客殿」は仏事を行う仏堂的な性格と、接客などの機能を持つ建物であったと述べたが、『福聚山史』第六十八回、この点から「本堂」と名称は変わっているものの、その姿は江戸時代に「客殿」とよばれた建物の姿だったのではないだろうか。

○祖師堂の由緒を体現する什具

もう一点、祖師堂の什具をみていくと、その説明が詳細であることに気づく。例えば、法華経の他に「慈海法華経」、黒塗礼盤など、什具の装飾などが記されている。そして、これらには「黒地葵紋付蒔繪三方」、「葵紋付麻幕」というように「葵紋」＝徳川家との関係をうかがわせる物があったことが見える。実は記載の先頭の「祖師堂什具」の付記に「但シ 鼠山感應寺より」とあり、これらの仏具が前回も取り上げた、鼠山感應寺の物であるから「葵御紋」が入っていると理解できるのである。

なお、これらの什具がこのあとどうなったか不明である。昭和二十年の戦火とともに焼失してしまったと考えるのが自然であろうが、什具は当時の常圓寺の姿、そして現在へという変化を映しているのである。